

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月22日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13457

研究課題名(和文)日本人の国民意識とそのイデオロギー的特質

研究課題名(英文)Japanese national identity and its ideological characteristics

研究代表者

唐沢 穰 (Karasawa, Minoru)

名古屋大学・情報学研究科・教授

研究者番号：90261031

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本人の国民意識(ナショナル・アイデンティティー)の構造として、「国家遺産へのコミットメント」「ナショナリズム」「愛国心」「国際主義」の因子から成ることが、複数の質問紙調査で繰り返し示された。イデオロギー的態度に関する意見評定や政党への投票意図等との関連から、特にコミットメント因子とナショナリズム因子が、保守的イデオロギー信念と正の関連を持つことが示された。この因子構造をもった仮想エージェントを用いて行なったシミュレーション結果は、エージェント間および政党からのコミュニケーションによる影響過程や政治的イデオロギー態度に国民意識が影響を与える過程を再現し例証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

調査データへの因子分析の結果は、Karasawa (2002)から長い年月と政治状況の変化を経ても、日本人の国民意識の大きな変化がないことが示した。ここで用いられたナショナル・アイデンティティー尺度については、システム正当化過程などとの関連により妥当性が示され、今後の当該分野での研究にとって有用なツールを提供できたと言える。シミュレーション研究の結果は、国民意識をめぐる個人間の相互作用や政党からのコミュニケーションといった複雑な過程をも仮想的に再現できることを示し、実証的事実に加えて研究法としても重要な貢献となった。さらに別の仮想的実験などに適用することにより知見の拡大を図ることができる。

研究成果の概要(英文)：National identity among Japanese citizens were repeatedly found across multiple studies to comprise 4 factors of Commitment to National Heritage (COM), Nationalism (NAT), Patriotism (PAT), and internationalism (INT). In particular, COM and Nat showed their association with conservative political ideology. An agent-based modeling was used to install the 4 factors into the agents through machine learning, and to have the agents interact each other as well as to receive influence from political parties regarding ideology-relevant issues. Results of this simulation were consistent with the hypothesized interaction processes among the agents holding the 4 kinds of national identity.

研究分野：社会心理学

キーワード：国民意識 ナショナリズム 愛国心 国際主義 イデオロギー シミュレーション 政党支持 システム正当化

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

冷戦の終結以降、グローバル化の進展や欧州連合（EU）をはじめとする多国間の協力を目指す理念や制度が発達したという世界情勢とは裏腹に、自国や自民族の分離・独立と、他集団を排斥しようとするナショナリズムの動きが、各地で台頭している。自国への愛着と排他主義は、しばしばイデオロギー的性質を伴って、個人の、また集団に共有された、価値意識や行動に影響をもたらす。こうした動向について、日本も決して例外ではなく、自民族中心主義や排他主義に基づく言説や政治的現象は、「国際化」が望まれるはずの日本社会にとって、重要な影響をもたらすと考えられる。

日常語において、「ナショナリズム」と「愛国心」はしばしば同義語として用いられる。しかし、この問題について研究を行ってきた社会心理学分野では、Kosterman & Feshbach (1989) 以来、両者を概念的にも操作的にも区別可能と考えるのが一般的である。そこでは、ナショナリズムを「他の国に対する支配性や優越性を志向する態度」と、愛国心を「自国に対する愛着的態度」と、それぞれ定義するのが通例である。主に因子分析を用いた研究の結果によると、両者の間に中程度の相関が見られるものの区別可能であることが、北米や西欧などの地域で追証されている。日本でも、Karasawa (2002) がこれらの区別が可能であることに加え、日本人に独自の因子として、「日の丸」「君が代」などの国家的シンボルや伝統的な文化に対する愛着が総合された因子として「国家的遺産へのコミットメント」が国に関する態度の主要素であることを明らかにしている。

2. 研究の目的

本研究では、日本人が自国やそれを取り巻く国際環境について抱く態度の全般を「国民意識」と総称し、その構造と、基礎にある心理的過程、およびイデオロギー的特質を、社会調査や実験によって解析することを目的とした。Karasawa (2002) 以来、長い年月が経ち、その間に自民党による一党支配（いわゆる「1955年体制」）からの政権交代などを経験した日本人に、どのような国民意識の変化があったかを明らかにすること目的であった。さらに重要な課題として、社会調査や実験で解明された要因によって確かに国民意識が成り立っていることを、エージェント・ベーストのコンピューター・シミュレーション（以下、シミュレーション）によって検証した。

3. 研究の方法

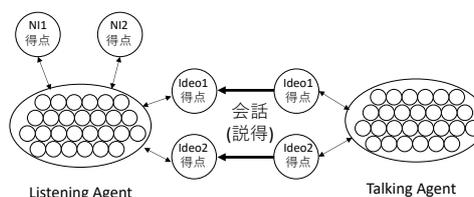
(1) 調査研究 1. : Qualtrics 社に委託して 2017 年 2 月にオンライン調査を実施した。参加者 705 名（女性 50.1%）を分析対象とした（年齢 $M = 47.93$, $S.D. = 10.73$ ）。Karasawa (2002) で用いられた「ナショナル・アイデンティティ尺度」（33 項目）をオンライン用短縮版（23 項目）に改変して実施した。他にジェンダー、移民受け入れ、再軍備、環境問題、原発問題の各イシューについて、「保守・リベラル」のイデオロギー性が反映することをあらかじめ確かめた態度尺度を用いて、回答者のイデオロギー的態度を測定した。また「保守・リベラル」の次元上における自己の立場を、経済的、社会的、政治的イデオロギーの領域ごとに測定した。

(2) 調査研究 2. : 調査 1 の結果の再現性を、異なるサンプルをもとに検証することを主な目的として実施した。クラウドワークス社に委託して 2017 年 9 月にオンライン調査を実施、465 名の参加を得た。ナショナル・アイデンティティ尺度（23 項目）、イデオロギー態度尺度に加え、「明日もし総選挙があったら」という前提で主要各政党に投票する意図がどの程度であるかを質問した。また、各政党のイデオロギー的立場として知覚された位置づけを測定するため、各政党が各イシューに対して示すであろう態度位置の推定を、同様の尺度上で求めた。この結果は、下記シミュレーション研究において研究となることが期待される。

(3) シミュレーション研究：上記の調査研究 2 で得られたデータをもとに、各回答者を表現した 465 のエージェントが構成できるまで機械学習を行った。こうして構成された各エージェントが、相互に態度を表明し合う「説得」の過程、さらに各政党がイデオロギー態度について「説得」を行う過程を van Overwalle & Heylighen, (2006) により開発されたエージェント・ベースト・モデルである TalkingNets を用いてシミュレートした。

イデオロギー的態度に基づく説得のモデル

- ランダムに Agent X を選択 (以下 Listening Agent)
- ランダムに Agent Y を選択 (以下 Talking Agent)
- Talking Agent のイデオロギー得点を Listening Agent のイデオロギーユニットに入力。
- その際、Agent 間の信頼性係数で乗じて入力。



(Ideo = イデオロギー, NI = 国民意識)

図 1. TalkingNet を用いた「説得」過程のモデル

(4) 実験研究：ここで測定している国民意識のイデオロギー性を例証するとともに、ナショナル・アイデンティティー尺度の妥当性を検証することを目的に、国家というシステムへの脅威が与えられたときに生じる「システム正当化 (van der Toorn, Nail, Liviatan, & Jost, 2014) の過程が作用するかどうかを、実験研究によって吟味した。特に、日米安全保障条約体制のもとで「アメリカ合衆国に隷属する日本」という位置づけでのシステムを、国民意識のうち特にナショナリズムの程度が高いほど、また保守イデオロギーが強いほど、正当化しようとする動機づけが生じるという仮説を検証した。大学生を対象とした予備実験「で、「トランプ大統領の就任によって日米関係の悪化が懸念される」という趣旨の情報を与える「脅威あり群」、「関係が改善する」という趣旨の情報を与える「脅威無し群」という条件設定が有効であることを確かめた。次に、クラウドソーシングへの委託によって一般サンプルを対象とするオンライン実験を行った。上述の操作の後、対米従属を肯定する態度を従属変数として分析した。個人差変数として、ナショナル・アイデンティティー尺度 (23 項目) による国民意識の測定、さらにイデオロギー態度の測定を行った。

4. 研究成果

(1) 調査研究 1. : 因子分析の結果は、Karasawa (2002) で報告された因子構造を、ほぼ再現するものであった。すなわち、「国家遺産へのコミットメント (COM)」「ナショナリズム (NAT)」「愛国心 (PAT)」「国際主義 (INT)」の 4 因子で、因子間相関のパターンも Karasawa (2002) におけるものと類似していた。

イデオロギー態度を目的変数に、上記 4 因子およびイデオロギー自己評定、そしてデモグラフィック要因を説明変数とした重回帰分析を、イシューごとに行った結果を表 1 に示す。全般に、COM は右翼的保守傾向を表し、自己評定による保守イデオロギー得点よりも、保守的態度について高い予測力を持っていることが明らかになった。それに比べて NAT がイデオロギー態度に寄与するケースは比較的少なく、PAT はさらに非イデオロギー的性質を持つことが示唆された。一方 INT は、一貫してリベラルな態度に寄与していた。

表1. イシュー別のイデオロギー態度に関する重回帰分析の結果

	ジェンダー	移民	軍事	原発	環境
COM	.208**	.201**	.248**	.182**	.093
NAT	.140*	.002	.144*	.079	.023
PAT	-.044	.119**	.079	-.027	-.055
INT	-.207**	-.353**	-.187**	-.132**	-.309**
社会_保守ーリベラル	.132**	-.016	-.147**	-.015	-.018
経済_保守ーリベラル	-.114**	-.143**	.041	.040	.039
政治_保守ーリベラル	.068	.154**	.150**	.163**	.032
性別 (女性=1)	-.152**	.019	-.178**	-.032	-.006
年齢	.064	-.064	-.112**	-.156**	-.116**
年収	-.011	-.054	.047	.085*	-.035
地域規模	-.061	-.020	.035	.036	.015
調整済み R ²	.241**	.255**	.283**	.148**	.121**

COM=国家遺産へのコミットメント, NAT=ナショナリズム, PAT=愛国心, INT=国際主義.
イデオロギー態度得点は、値が高くなるほど保守性を示すようコーディングされている。
表中の値は偏標準回帰係数(β)

(2) 調査研究 2 : ナショナル・アイデンティティー尺度に関する因子分析結果は、前調査と同等の 4 因子を再現した。COM と保守的態度、自民党支持などの関係が見いだされた。

(3) シミュレーション研究：調査研究 2 の参加者 465 名を表現するエージェントの作成に成功するとともに、これらを生者とした場合、イデオロギー的態度における話者間の類似性が投票行動意図に影響することをシミュレーション結果が示した。一方、聞き手の国民意識が、上記の関係を調整するメカニズムが示唆された。また、モデル上において国民意識を処理するシステムと、イデオロギー的態度を処理するシステムとの間に直接経路を設定し、情報をダイレクトに相互作用させることで、データの説明力があがることがわかった。ここで構成されたエージェントを、異なる実験条件間にランダムに配置した場合の仮想実験などにも多くの可能性

を拓く結果となった。

以上のシミュレーション手法の開発段階で得られた関連知見は、下記の論文②～⑤として報告されている。

(4) 実験研究：ナショナル・アイデンティティ尺度に関する因子分析結果は、これまでと同様に4因子構造を再現した。そして、日米関係の現状を肯定する態度を従属変数とした重回帰分析では、COMおよびNATの寄与が有意であったのに加え、脅威の操作の主効果も有意で、システム正当化の反映と解釈された。ただし交互作用は有意ではなく、国民意識の調整効果は確かめられなかった。

[以上での引用文献]

- Karasawa, M. (2002). Patriotism, nationalism, and internationalism among Japanese citizens: An etic-emic approach. *Political Psychology*, 23, 645-666.
- Kosterman, R., & Feshbach, S. (1989). Toward a measure of patriotic and nationalistic attitudes. *Political Psychology*, 10, 257-274.
- Van der Toorn, J., Nail, P. R., Liviatan, I., & Jost, J. (2014). My country, right or wrong: Does activation of system justification motivation eliminate the liberal-conservative gap in patriotism. *Journal of Experimental Social Psychology*, 54, 50-60.
- Van Overwalle, F., & Heylinghen, F. (2006). Talking nets: A multiagent connectionist approach to communication and trust between individuals. *Psychological Review*, 113, 606-627.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計5件)

- ① Smeeks, A., Jetten, J., Verkuyten, M., Wohl, M. J. A., Jasinskaya-Lahti, I., Ariyanto, A., Autin, F., Ayub, N., Badea, C., Besta, T., Butera, F., Costa-Lopes, R., Cui, L., Fantini, C., Finchilescu, G., Gaertner, L., Gollwitzer, M., Gómez, Á, González, R., Hong, Y-y., Jensen, D. H., Karasawa, M., Kessler, T., Klein, O., Lima, M., Renvik, T. A., Megevand, L., Morton, T., Paladino, P., Polya, T., Ruza, A., Shahrazad, W., Sharma, S., Teymoori, A., Torres, A. R., van der Bles, A. M. (2019). Regaining in-group continuity in times of anxiety about the group's future: A study on the role of collective nostalgia across 27 countries. *Social Psychology*. (Published online, October 9, 2018). DOI:10.1027/1864-9335/a000350 査読あり
- ② Lee T., Greening S., Ueno T., Clewett D., Ponzio, A., Sakaki M., & Mather, M. (2018) . Arousal increases neural gain via the locus coeruleus-norepinephrine system in younger adults but not in older adults. *Nature Human Behavior*, 2, 355-366. DOI: <https://doi.org/10.1038/s41562-018-0344-1> 査読あり
- ③ Allen, R. J., & Ueno, T. (2018). Multiple high-reward items can be prioritized in working memory but with greater vulnerability to interference. *Attention Perception & Psychophysics*, 80, 1731-1743. DOI: <https://doi.org/10.3758/s13414-018-1543-6> 査読あり
- ④ Ueno, T., Meteyard, L., Hoffman, P., & Murayama, K. (2018). The ventral anterior temporal lobe has a necessary role in exception word reading. *Cerebral Cortex*, 28, 3035-3045. DOI: <https://doi.org/10.1093/cercor/bhy131> 査読あり
- ⑤ Sakaki, M., Ueno, T., Ponzio, A., Harley, C. W., & Mather, M. (2018). Emotional arousal amplifies competitions across goal-relevant representation: A neurocomputational framework. *Cognition*, 187, 108-125. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.cognition.2019.02.011> 査読あり

[学会発表] (計4件)

- ① 唐沢穰・塚本早織・柳学済 (2018) 日本人の国民・国家意識とそのイデオロギー性：愛国心、ナショナリズム、国際主義の現在 日本社会心理学会第59回大会 (ロングスピーチ) (8月29日) 追手門学院大学
- ② Karasawa, M., Ryu, H., & Tsukamoto, S. (2017). The ideological nature of Japanese nationalism and patriotism. The 40th annual scientific meeting of the International Society of Political Psychology, Edinburgh, Scotland (June 30).
- ③ Ishibashi R., Ueno T., Saito S., Mima T., Lambon Ralph M. A., & Pobric G. (2017). Enhancing semantic cognition of Japanese two-Kanji words using transcranial direct current stimulation. 日本認知心理学会第15回大会. (6月4日) 慶應義塾大学
- ④ Atkinson, A. L., Berry, E. D. J., Waterman, A. H., Baddeley, A. D., Hitch, G. J., Ueno, T., & Allen, R. J. (2017). Are there multiple ways to direct attention in visual working memory? European Society for Cognitive Psychology (ESCoP) meeting.

〔図書〕（計 1 件）

北村英哉・唐沢穰（編著）（2018）偏見や差別はなぜ起こる？心理メカニズムの解明と現象の分析 ちとせプレス （総） 290 頁

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：上野 泰治

ローマ字氏名：Ueno, Taiji

所属研究機関名：高千穂大学

部局名：人間科学部

職名：准教授

研究者番号（8 桁）：20748967

研究分担者氏名：浅井 暢子

ローマ字氏名：Asai Nobuko

所属研究機関名：京都文教大学

部局名：総合社会学部

職名：講師

研究者番号（8 桁）：30552492

(2)研究協力者

研究協力者氏名：柳 学济

ローマ字氏名：Ryu Hakche

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。